

P-169 当院で経験した粘表皮癌の5例

佐世保市立総合病院内科¹、同外科²、同病理³、
長崎大学第2内科⁴

○真崎義憲¹、吉塚直人¹、荒木 潤¹、夫津木要二¹、
水兼隆介¹、浅井貞宏¹、南 寛行²、中村 譲²、
岩崎啓介³、河野 茂⁴

【目的】粘表皮癌の5例を経験したので臨床的検討を加え報告する。

【症例】症例は、当院において、平成元年から平成8年の間に経験した5例で、年齢は17歳から79歳、平均49歳であった。性別は男性3例、女性2例の5例である。発見動機は、検診2例、咳嗽2例、血痰2例であった。診断までの期間は、反復性肺炎や喘息として加療を受けていた例では、2年以上要したものがあつたが、早期に気管支鏡を施行した例では短かつた。入院時検査所見では、炎症所見に乏しいこととCEA, SCC, NSE等の腫瘍マーカーの上昇がほとんど見られないことが特徴的であつた。病理組織学的には、高分化が3例、低分化が2例であり、低分化の1例は腺表皮癌と鑑別しにくい症例であつた。治療は全例に対して手術が施行された。術後経過は、1例が術後肺炎を合併して死亡した以外は4例とも軽快退院している。

【結果および考察】粘表皮癌は非常に稀な疾患であり、鑑別診断として最初にあがる疾患ではないが、診断までに長期間を要した症例もあり、他の疾患でfollowしている患者であっても治療への反応が悪いものについては、気道病変を考え気管支鏡による検査が有用であると考へられた。

P-171 Benign metastasizing leiomyomaの1症例

岐阜総合病院内科¹、同病理²、岐阜大学第一病理³
岐阜医療技術短期大学診療放射線科⁴

○新井 正¹、柴山鷹樹⁴、伊東祐二¹、早川和良¹、
戸島 敏²、渋谷智顕²、吉見直己³、安田 洋¹

症例は45歳の女性。検診の胸部X線写真にて、両側肺野に多発性の腫瘤陰影を指摘され近医を受診し紹介にて来院した。転移性肺癌を考え原発巣を検索するも不明であつた。血清腫瘍マーカーは検索しえたものは陰性であつた。気管支鏡による経気管支的肺生検にて肺過誤腫が疑われたが確定診断に至らなかつたため開胸肺生検を実施した。本患者は7年前に子宮筋腫の手術を受けていることから、この標本とを比較検討して子宮筋腫の肺転移、いわゆるBenign metastasizing leiomyoma(BML)と診断された。子宮筋腫に伴う肺平滑筋腫の鑑別診断として①子宮筋腫の肺転移、②低悪性度の平滑筋肉腫の肺転移、③多発性平滑筋腫、④肺平滑筋腫性過誤腫などがあげられる。本症例のように子宮筋腫の肺転移の報告は我々が調べた限りにおいては、欧米で49例、本邦でも22例の報告がみられるにすぎない稀な症例と考へられる。良性である子宮筋腫が肺に転移する理由として、血管内に突出した腫瘍細胞が自然に、または外科的処置を施す際に病巣部の細胞が剥がれ血行性に転移する説があげられている。治療としては外科的治療法と保存的治療法があるが、本症例は多発性であり手術は施行していない。また本人の希望もあり未治療で嚴重に外来経過観察中である。

P-170 肺原発平滑筋肉腫の一例

公立三次中央病院呼吸器科：

○満田一博、由田康弘

症例は44歳女性。平成4年に子宮筋腫の手術歴がある。平成6年5月の検診にて左肺野に異常陰影を指摘され、7月7日に当科に入院した。胸部X線及び胸部CTでは、左肺のS⁴領域に最大径6cm大の一見extrapleural signを伴った腫瘤影を認めた。超音波ガイド下に経皮肺生検を施行し、組織学的に明らかな分化を示さない肉腫との診断を得た。さらに、胸部超音波検査では、腫瘍は呼吸性変動を示したことから、肺原発肉腫の術前診断で7月26日、左上葉切除術を施行した。腫瘍は大きさ8×6×4cm大で、臓側胸膜を底辺とした半球状を呈した。病理組織学的には、明らかな分化を示さないいわゆる肉腫の像を示したが、免疫組織化学的染色及び電顕にて平滑筋肉腫と診断された。患者は術後3カ月に脳転移、さらに半年後に局所再発を来し、1年半年後に死亡した。

P-172 Pulmonary Blastomaの切除例の経験

東京都立駒込病院外科

○森山裕一、池田高明、西村嘉裕、関みな子

【目的】Pulmonary Blastoma(PB:肺芽腫)は比較的稀な肺特有の癌肉腫とされており、臨床的には、大きな腫瘤を形成し予後不良とする報告が多い。治療法についても、定まっていない。我々は、臨床的に特徴のあるPBの2切除例を経験したので、報告する。

【症例1】65歳男性。主訴は血痰。左上葉に6cm大の腫瘤影を認めた。気管支鏡では、左上区から主気管支まで突出する有茎性の腫瘍を認めたが、生検では壊死組織のみであつた。I期の肺癌として、左上葉切除、R2郭清を施行した。術後化学療法として、CDDPとVDSの投与を2クール施行した。現在、術後10年4ヵ月無再発生存中である。

【症例2】71歳男性。胸部異常陰影の精査目的にて入院。右肺門部に5cm大の腫瘤影を認め、S⁸に1cmの結節も認めた。術前に組織学的な確定診断はつかなかつたが、縦隔リンパ節転移を有するIIA期の肺癌として右中下葉切除、R2郭清を施行した。術後の病理組織学的検索で、原発巣はS¹⁰の0.7cm大の腫瘍で、指摘された病変はすべてリンパ節転移であつた。後療法は施行しなかつた。術後1年3ヵ月無再発生存中である。

【結語】長期生存例と、原発巣の小さな例を報告した。2例とも術前には確定がつかず、術後の検索でPBと診断された。治癒切除が施行されれば予後は良好である。